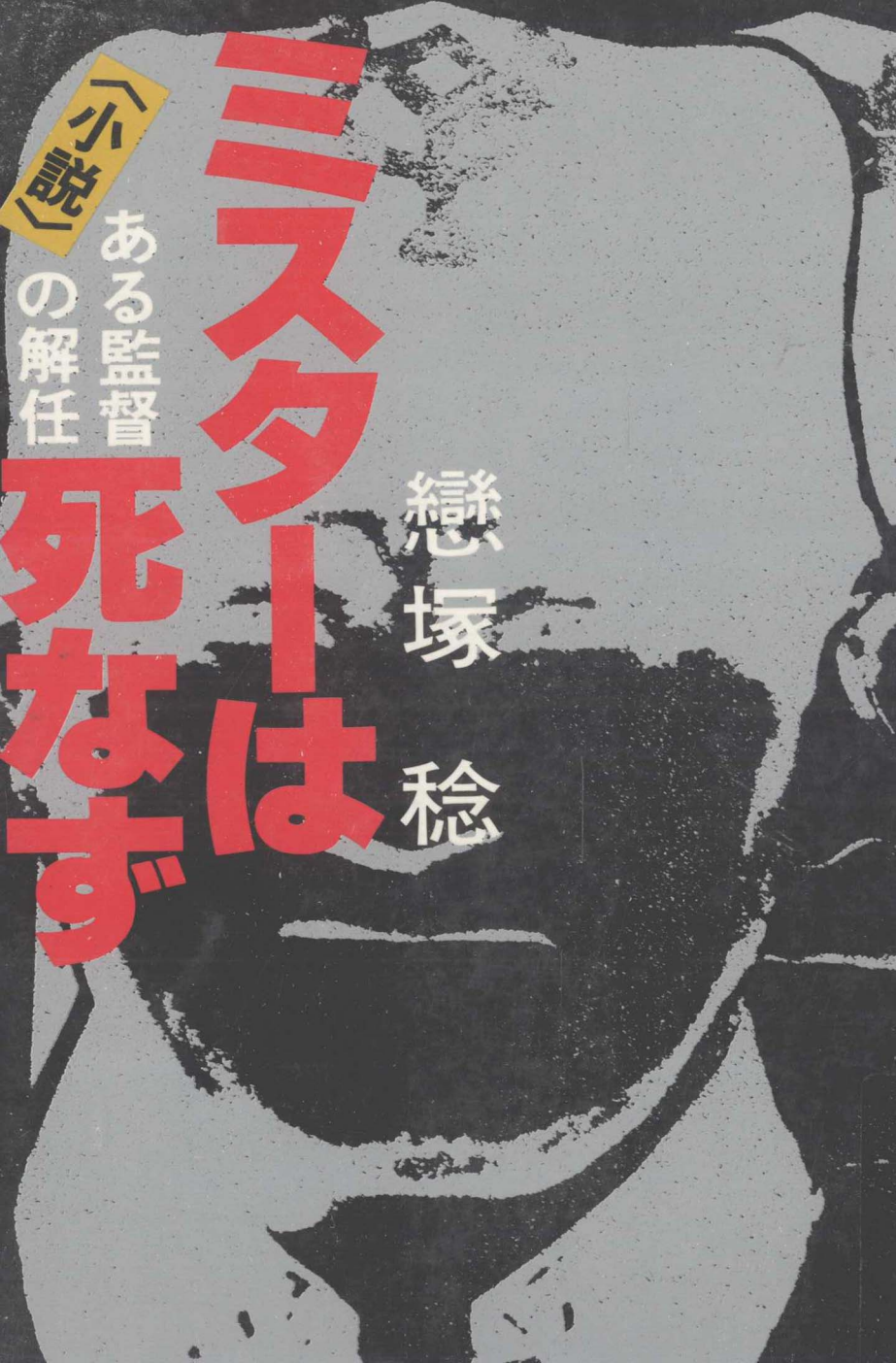




小説
ある監督
の解任

ミスター 死なず

戀塚
稔

ミスターは 死なず

小説

ある監督
の解任

戀塚
稔



ミスターは死なず

—小説・ある監督の解任—

定価900円

発行 昭和57年5月10日

10刷 昭和57年7月7日

著者 戀塚 稔

発行人 木村 芳光

〒112 東京都文京区小石川1-14-4

TEL 03 (812) 8584

発売元 株式会社 評伝社

〒162 東京都新宿区市谷船河原町12小俣コーポ201

TEL 03 (269) 7069 / 振替 東京2-34164

印刷・オーシャンコマース / 工雅印刷 製本・文勇堂製本

0093-000081-7193 ©Minoru Koizuka 1982

ミスターは死なず／目次

一章	事件の発端	5
二章	悲劇の誕生	35
三章	運命の一日	65
四章	男のケジメ	97
五章	波瀾の前兆	125
六章	復権の画策	147
七章	陰謀と暗躍	167
八章	期待と願望	209

カ
バ
ー
デ
ザ
イ
ン
イ
ラ
ス
ト
レ
ー
シ
ョ
ン

中 村
哲 也
江 口
称 弘

一章

事件の発端



その日、大手町のY新聞社ビルの七階にある大会議室は、三百人近い報道関係者でごった返していた。テレビカメラのライトが交錯する中にもうと煙草のけむりが立ちのぼり、異様なざわめきがあたりに充満している。現在四時四十五分、間もなくオーナーが現れるころだ。この日、Y興行——というより、ジュピターズ球団といったほうがわかりやすいであろう——に勤めるわたしたち職員は、それこそ朝からてんでこ舞いであった。

この日、球団オーナーの記者発表は、はじめ、午後一時からと発表された。それが、三時から緊急役員会議ということになり、結局、五時にくり下げになったのである。

ジュピターズ球団は、前日の広島でのデーゲームでこの年の公式戦の全日程を終えていたが、そしてリーグ優勝は広島にフランチャイズを置くカープに早々と決まっていたが、まだ公式戦全日程が終わったというわけではなかった。日本シリーズも、これからである。それなのにこの騒ぎである。球団の一職員としていうと、やはりリーグ優勝をして、その上に日本シリーズを制して日本一になってもらいたいと思うのは当然である。が、今年はオールスター前からジュピターズは三位と四位のあいだを低迷するばかりで、リーグ優勝はともおぼつかなかった。現に、最後の広島での二連戦が二連勝でやつと一つ勝ちこしという成績である。せいっぱいがんばって、五割、そしてAクラスがやつとというしまつであった。日本シリーズなど、とてもおおよびではない。ということとは、チームの全日程を消化してしまえば、今年の仕事は一応けりがついたということになる。日本シリーズは、ジュピターズ球

団の職員としては、まあ、残念なことだが関係はない。あとはドラフト会議、そして来年度の契約更改が主な仕事ということになる。言ってみれば、きのうでジュピターズの公式戦がすべて終わったということは、職員であるわたしたちにとっては、今日は十分に息抜きができたはずであったのだ。それなのに、この騒ぎである。

球団の一職員として、今まで幾度も記者発表の席の設定にたずさわってきたわたしではあったが、この日のそれは、スポーツの世界の明朗な感触とは全く異質の、異様ともいふべき、妙にわだかまりののこる雰囲気をもつものであった。たいていの場合、これからどんなことが発表されるかは、報道陣およびわたしたち球団内部の者は知っているのがふつうである。いや、正式に知らされてはいなくても、おのずから分かっているものなのである。期待の新人の入団発表などの明るい話題の場合はもとよりそうであったし、また、球団スタッフの交替にしても、少なくとも記者発表の会場を設定する段階においては、これからどんな発表をするかということぐらい、わたしたち職員には知らされてきたものだ。それが今回はどうであろう。ジュピターズ球団の内部にいる人間ですら、皆目知らされていないのである。

それらしい予感、前からあった。みな、そのような空気をうすうす感じとっていたようであった。が、そんなことが、と思う気持の強かったのも事実だ。少なくとも球団職員の大部分は、そう思っていたはずだ。今日の記者発表にしても、オーナーがああ今朝のスポーツ毎日の記事内容を肯定するのか否定するのか、誰一人として知らされていなかった。

「あなた、たいへんよ、ちょっと、起きてよ」

前夜は、ジュピターズの最終戦である。この試合をおとすと二年連続の負けこしということになる。この試合、広島が先行したが、入団二年目の外人助っ人ピーターの二点本塁打が出、角谷の好リリーフで五対三でものにした。これで勝率五割四厘、同時にAクラスに留まることが確定したのである。その夜、わたしたち球団職員としては、飲まずに居られなかった。当然、帰宅は午前さまである。

「ねえ、あなたったら、大事件よ」

「なんだい、また過激派か。もうちょっと寝させといってくれよ。今日はゆっくり行くから」わたしと京子は、結婚して六年目になる。今年の春、やっと念願のマンションを購入して、ここ京成成田線の八千代市に引っ越してきたばかりである。勤め先の大手町までちょっと距離があるという難点を除けば、新築マンションの生活はまず申し分ないといえた。ただ一つ、気がかりなことがあった。三里塚支援の中核派など過激派の動きである。彼らは突然、何の前触れもなく行動に出る。わたしの乗っている通勤電車が、いつなんどき爆破されるのか、全くわからないのだ。が、そんなことを気にしていたらきりがいい。きのう、長かったペナントレースがやっと終わったのだ。今日はゆっくり出社するから……と、わたしは、二日酔いの頭をかかえ込むと、蒲団の中で身をまるめた。

「あなた、起きてよ、ねえ、あ、終わっちゃった」

京子が蒲団をゆする。

「何が終わったんだ」

わたしは、まだ寝ていたかった。

「そんな悠長なこと言っていないの。長岡監督がね」

「長岡さんがどうかしたのか」

「解任だって。解任って、くびっていうことでしょ」

「なんだって」

わたしは思わず飛び起きた。この時、前夜から体の中に残っていたアルコールは一瞬のうち霧消していたといつてよい。

「新聞持ってこい。すぐにだ」

わたしの家では、わたしの勤めているジュピターズ球団（正しくは、Y興行という）の親会社である三大新聞の一つ、Y新聞と、その資本下にあるスポーツ報道の二紙をとっている。がぼとはね起きたわたしは、目を皿のようにして二紙のページをめくった。

「どこにも書いてないじゃあないか」

「あらそうお、へんね。今さっき、テレビのニュースで言ったのよ」

「何だって。何て言ったのだ」

「ジュピターズ球団の長岡監督が解任ですって」

「ほんとうか。何チャンだ」

「六チャンネルよ」

「正確に言ってくれ」

「ちょっと待って。そう、解任されるもようって言ってたわ。ほんとうかしら。だったら長岡監督、可哀そうね。せっかくAクラスを確保したというのに」

「飯だ、飯の仕度をしてくれ」

わたしは立ち上がると、新聞を投げ棄て、広田弘報担当の自宅のダイヤルを回した。が、幾度かけても、話し中のツー・ツーという音が返ってくるのみであった。

「もし事実だとしたら大変だ。早出をするからワイシャツを出せ」

わたしは送話器をガチャンと置くと、京子に向かって言った。

この朝、駅でわたしが買い求めたのは、スポーツ日刊、東都スポーツ、スポーツ毎日、朝日スポーツ、サンスポーツの五紙で、これにスポーツ報道を加えた六紙が、首都圏で発行されている日刊スポーツ紙のすべてである。

めあてはすぐに分かった。一般紙でY新聞とともに三大紙の一つに数えられている全国紙を親会社とするスポーツ毎日である。「長岡監督解任、後任は藤川か」赤刷りの大きな活字が一面を大きく横切っている。

——ジュピターズ球団の正田オーナーは、ついに腹を決めた。長岡監督の更迭である。思えば、過去六年のあいだ、二回ペナントを握ったとはいえ、一度も日本一の座につくことはできず、そしてそのあとは五位、今年もAクラスとはいえやっと三位、それも最終試合に勝つてかろうじて五割に達するという成績に、オーナーもこれ以上現指導体制でいくことの非をさとったようである。思えば長岡体制が生まれて六シーズン、その通算成績は、三百八十七勝三百三十八敗五十五引分け、勝率五割三分三厘で、単にこれだけを取ると、栄光あるジュピターズの歴代監督のうち、文句なしに最低である。名選手必ずしも名監督ならずの言葉があるが、その意味でいうと、オーナーの決断は遅きに失した感があるといえないこともない。なお、後任監督には藤川氏（現評論家）が有力で、一部では、既にオーナーから監督要請の電話が入り、藤川氏が快諾したとの報も流れている……。

そんな、ばかな。

わたしは、改札をくぐるのも忘れ、他のスポーツ紙のページをめくった。長岡監督解任といえ、それは大ニュースだ。が、今朝家で見たと同様に、他のスポーツ紙には、そんな記事は一行たりとも載っていない。長岡監督に関するものといえ、わずか東都スポーツに、近々青森県の八戸市民大学講座の講師として出向くことになるが、いくら一回きりの講演とはいえ、大学と名のつくものへの講師というのはいくらなんでも面はゆくてという、雑報記事が一つ載っているのみであった。

駅の売店の前に呆然とたたずむわたしの目の前で、いつもとは違ってスポーツ毎日だけが飛ぶように売れていく。と、あらかじめそのことを見越していたかのように、スポーツ毎日の二刷りの包みが駅の売店に運びこまれてきた。わたしは、あの根っからのスポーツマンで、底抜けに明るい長岡監督の笑顔を脳裡に浮かべた。

それにしても……。

わがジュピターズ球団は、ある意味では、親会社であるY新聞、同系列のY放送、そしてスポーツ専門紙のスポーツ報道と表裏一体の関係にある。そのいずれもが報道していないのに、なぜスポーツ毎日だけが……。

「おい、邪魔だ、そんなところにつっ立っていて」

いきなり背をこずかれて、わたしははっと我に返った。朝の通勤時間帯である。わたしはあわててポケットに手をやると、定期を出して改札をくぐった。

わたしが大手町のY新聞社ビルの九階にあるY興行ジュピターズ球団のオフィスに着いたのは、定刻の始業時間より三十分近く早かった。それなのに、既に各社の記者たちが二十人近く、廊下にたむろしていた。ドア越しに、ひっきりなしに鳴る電話のベルの音がした。

「橘さん、いったいどうなっているのです」

顔見知りの記者の一人がわたしに近づくと、言った。わたしは、黙って首を振った。だっ

て、何も知らされていないのだから、答えようがない。

オフィスに入ると、わたしと同じように早出をしてきた者が大ぜいいた。皆、鳴りつづける電話の応対に右往左往している。

「みなさん、問い合わせには知らぬ、存ぜぬでとおしてください。重ねて聞かれたら、そんなことはないと思います、と答えるように、オーナー、代表、弘報担当は不在です。それ以外の言葉はつつしむように」

自ら不在という広田弘報担当が、球団事務所のドアの内側に立って、出社してくる球団職員たちに向かって幾度も幾度も同じことを言った。ふだんは冷静沈着な広田も、この日は顔がいささか引きつっているようであった。

いつもの朝は出社するとコーヒーを飲みながら各社のスポーツ紙に目を通すのが日課であったが、この日はそれどころではなかった。スポーツ毎日にか載っていないということが、全国のジュピターズファン、長岡ファンを不安におとし入れたのだ。正しく文字通り、全国津々浦々からの、電話問い合わせの大攻勢なのである。

「橘君、ちよっと」

席につこうとしたわたしは、広田弘報担当に呼ばれた。

「いいか、今日だけは、記者もカメラマンも一人もフロアの中に入れないように頼む。あ、それから一時から記者発表を行うから、総務から二、三人回してくれないか」